

海のない町・大垣にある灯台と「おくのほそ道」

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

新幹線時代到来後も、東京駅と岐阜県大垣駅との間を東海道本線経由で結ぶ夜行普通列車が設定され、夜の間は東京駅から湘南・東海方面への最終列車として、翌朝には浜松周辺から名古屋方面への始発列車として機能した。1982（昭和57）年に「青春18のびのびきっぷ」（翌年からは「青春18きっぷ」）が発売されると、1枚あたり2,000円の切符1枚で0時から終電までの1日間、普通列車が乗り放題となることが人気を集めて、全区間を乗り通す乗客で混雑した。

大垣夜行と呼ばれる143M列車の1978年時点でのダイヤでは、東京を23:23に発車し、新橋23:31→品川23:36→川崎23:46→横浜23:57→大船0:12と進む。東京からここまでの乗車券を別途購入して、大船から青春18きっぷを使い始めると、最長で23:58着の九州・熊本まで、まるまる1日列車に乗り続けることも可能であった。次の藤沢0:17から小田原0:52までは各駅に停車して、湘南方面の最終電車として乗客を運ぶ。小田原発0:53の後は、熱海1:13→三島1:27→沼津1:35→原1:54→静岡2:28と、東京駅発最終の新幹線こだま号を逃した乗客たちを、各駅へ送り届けた。静岡を出ると、浜松までの各駅は通過し、浜松発4:03からは各駅停車に戻って（途中、三河大塚と三ヶ根の両駅は通過）、名古屋方面への始発列車として乗客を運んだ（名古屋着は6:10）。名古屋を6:30に発車すると、岐阜着は7:00、そして終着の大垣着は7:13であった。若者ならではの体力勝負の面は大いにあったが、ここから列車を乗り継ぐと、関西方面の主要駅には午前中に到着して、先述した熊本のほか山陰本線・益田や、意外なところでは下関から別途フェリー料金を支払えば、韓国・釜山まで足をのばすことも可能であった。

2人ずつが向かい合わせで座るボックスシートの窮屈さに音をあげて途中下車し、大垣駅周辺を巡ったことがある。駅からまっすぐに歩くと、水門川（すいもんがわ）の川端に出る。大垣城の外濠を兼ねて整えられたこの川は、湧水を水源とするためか、ゆったりと流れている。その豊かな川の流れをたどっていくと赤い橋がかかる一角に出て、そのもとには寄棟造りの灯台の姿も見える。高さは8m、燈芯を包む上部には油紙障子が填め込まれている。船町港跡にある、住吉灯台である。裳裾を引くような均整の取れた立ち姿は、川の流れともよく調和している。

海のない岐阜県の内陸にある大垣に、なぜ灯台があるのだろうという疑問が、頭に浮かぶ。答えは、かつて大垣で栄えた「舟運」である。

水門川は、ときの大垣城主が開削した運河を改修した流れで、木曾川・長良川とならぶ大河である揖斐川に合流する。その経路を利用すれば、河口にある東海道の主要な宿場町・桑名との往来も可能で、水門川の河畔には、船問屋の倉庫や建物がいくつも立ち並んだという。江戸の初め、航行の安全を願って設けられた常夜灯が、1840（天保11）年に灯台となり、1887（明治20）年に再建されて今に至るのだという。1882（明治15）年、大垣～桑名間には小型蒸気船による定期航路が開設され、1919（大正8）年に桑名～大垣間に養老鉄道が開通するまでの間、船便の往来が続いたという。

ここ大垣の地で156日間・距離にしておよそ2,350kmにおよぶ『おくのほそ道』の旅を締めくくり、水門川の豊かな流れが担う舟運を利用して、伊勢神宮を目指したのが、松尾芭蕉である。

この旅の始まりは、1689（元禄2）年3月27日。この日に江戸の深川を発って舟で千住の堤に上がり、武蔵から、下野、岩代、陸前、陸中、陸奥、出羽、越後、越中、加賀、越前とたどって大垣に到着したのは同年8月21日。芭蕉は大垣に計4回立ち寄って藩士らの間で盛んだった俳諧に影響を与えた。この地に10日間余滞在した後の同年9月6日、船問屋を営んでいた友人・谷木因（たに ぼくいん）とともに、水門川の船町港から長島・大智院へと揖斐川を舟で下って、伊勢神宮を目指した。記録によると、この年伊勢では、9月10日に内宮、13日に外宮の第46回式年遷宮が行なわれていたのである。

旅の始まりの時期に千住で詠んだ「行春や鳥啼魚の目は泪」と対句になる形で、ここ大垣で「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」という句を詠んで、旅のむすびとした芭蕉の想いを考えてみる。この句には、「行秋」と「蛤」というふたつの季語があり、季節も「秋」と「春」であり一致しないが、あえて江戸での旅立ちの春の季語を冒頭に置き、各地の歌枕などを訪ねて門人たちと交流し、無事大垣にたどりついてむすびの地にできたという喜びを「行秋」に込めたのであろう。さらに、その先に目指す伊勢では、20年に1度の式年遷宮が行われ、その圏域にある二見浦の地は、芭蕉が「師」と仰ぐ西行が1180年に庵を結び、「今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合とておほふなりけり」という歌を詠んだ地でもある。その意味で『おくのほそ道』の旅路は、西行没後500年を記念する、芭蕉の巡礼にもなったのである。

「青春18きっぷ」を使う自由な旅の結節点として知られたJR大垣駅から分岐する、近鉄・養老線（現：養老鉄道・養老線）の西大垣駅は、船町港跡から徒歩12分ほどの距離にある。水門川の水運に取って代わったこの鉄道に乗ると、桑名まで約1時間。養老線桑名駅のホームは、近鉄名古屋線のホームに隣接しており、ここで宇治山田方面の特急に乗り換えると、1時間余で伊勢に到着する。芭蕉が舟と徒歩などで、胸躍らせながら師の面影をたどった経路を、今の鉄道網は3時間弱で踏破するのである。